

日本声楽発声学会

学会通信第 49 号

2023 年 4 月発行

会員の皆さま

～ 会長職を去るにあたりまして ～

会長 川上勝功

『学会通信第 49 号』をお届けいたします。

コロナ、コロナで振り回され続けて、とうとう会長任期最後の瞬間を迎える時がやって来てしまいました。

昨年は、やっとのことで 8 月の夏季研修会と 11 月例会を、何と云うことでしょうか、ほぼ 3 年ぶりの開催に漕ぎ着けることとなりました。まだコロナ狂想曲は最終楽章に至っておりませんでしたので、充分準備できたわけではありませんでしたが、それでも午後からの「特別講演」と「現役声楽家の演奏とお話」のコーナーは、多くの皆さまから熱い賛辞のお言葉をいただくことができました。理事の皆さんを始め多くの方々のご協力で会を締めくくることが出来ましたことに、紙面をお借りいたしまして心から御礼を申し上げたいと思います。

さて、前号の『学会通信第 48 号』では、故柴田睦陸先生と故米山文明先生が、学会の『40 年史記念号』にお書きになられた文章に絞って特集をさせていただきました。そしてこの 3 月発行の『第 49 号』には、『第 48 号』でご紹介しきれなかった『40 年史記念号』から、前記のお二人以外の方々と、「学会」の草創期に日本の声楽発声の研究に多大な貢献をされ、情熱の炎を燃やし続けてこられた先輩方の、貴重な思いの丈を特集させていただく予定です、と書きました。

しかし、実際にお一人お一人の書かれた文章を幾度となく読み返してみますと、どの方の文章も当たり前のごとく非常に中身が濃く、読むだけであれば大変面白いと言うか、興味をそそられる内容に満ちているのですが、いざ、私ごとき浅学非才な凡人がそれを要約するなどの大それたことは、金輪際似つかないことと悟りました。

無責任なヤツとお思いになる方もおられることと思いますが、いつの日か原文のまま世に示したいと思うに至ったのであります。私の考えていたことがそれはそれは全く無謀であり、無鉄砲な計画であったと反省いたしております。お詫びいたします。

但し、その中でもお一人だけですが、『40 年史記念号』が発行された 2005 年（平成 15 年）、当時学会の顧問でおられた久留米大学名誉学長の平野 実先生が『学会の今後』と題してメッセージをお寄せ下さっておられますので、次に原文のまま掲載させていただきます。

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

『学会の今後』

40年の歴史をもつ本学会が、今後どのように発展して行くかは、大切な問題であろう。会員の研究と研究交流が盛んに行われることが、学会発展の基本である。

私自身も大学時代約40年、声の研究を熱心に続け、世界一流の研究者達と交流して、勉強をした。非常に多くのことが分かってきた。しかし今もなお「科学は芸術に遠く及ばない」と痛感する。とくに声の音色については、科学的に分かっていないことが多い。声楽の専門家と医学や科学の専門家との、綿密な協同研究が、根気よく続けられることが、芸術と科学の距離を縮める道である。

本学会の今1つの大切な仕事は、良い発声指導法の研究と、良い発声指導者を増やすことであろう。The Voice Foundationのシンポジウムでは、声楽の先生が発声法のレッスンを学生に行い、医学や音声科学の専門家がそれを評価してコメントする、聴衆も討論に参加する、というプログラムもあった。発声の良い指導法は1つではない。いろいろな指導法の長所、短所を、“科学的に”明らかにしていく事が、良い指導者を育てる鍵の1つである。

学会の益々の発展を期待して……。

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

この文章の中身は柴田先生や米山先生の念を通して、今、私が心に抱いている念の全てを表しているものと感じております。平野 実先生はアメリカに留学され、USC（南カリフォルニア大学）で勉強されたと伺いましたが、偶然のことですが、私（川上）もUSCで声楽の勉強をしてみりました。

皆さまにはご報告が遅くなりましたが、昨年11月24、25日京都で開催されました「日本音声言語医学会」の会合に、幸いなことにご招待を受けまして、当「発声学会」例会の直前でしたが、行ってまいりました。

そこでは私は、『鼻腔共鳴の効用』と言うタイトルで発表させていただく予定でしたが、急遽30分の持ち時間のうち2/3位を使って「明治以降の100年に亘る日本の声楽指導の歴史」と「発声学会の歴史」を述べさせていただきました。肝心要の『鼻腔共鳴』については10分不足の話で制限時間いっぱいになってしまいました。

しかし、このお声掛けをして下さった方が、実は、当「発声学会」で2019年8月の夏季研修会で『歌唱の生理機構と声帯のメンテナンス』と題しまして、素晴らしい講演を披露して下さいました平野 滋先生で、氏は前述の平野 実先生のご子息です。平野 滋先生は私が推薦し、講演が実現したという経緯がありました。

今回の京都での「日本音声言語医学会」では平野 滋先生は会長職を担っておられました。そのようなわけで、その後も平野先生とメールのやりとりをし、「日本音声言語医学会」の

方でも、当「発声学会」との共同研究や勉強会、あるいはシンポジウムのような形のものを望んでおられると仰って下さったのです。

このところ学会全体の“士気”がコロナ禍によってどん底まで落ち込んでしまったように感じておりましたが、逆に今こそが「発声学会」を立て直す大きなチャンスと捉えております。

他の学会との連携が難しいのであれば、声楽指導に深く関与している「日本合唱指揮者協会」や「全日本合唱連盟」にも働きかけて、共同研究や勉強会、そしてシンポジウム等の計画を試みてはどうかと考えました。勿論、理事会の意向を伺って見なければなりません、コロナ禍が現在よりも鎮まり、対面で物事が推移できるようになれば実現は可能となってくるものと思われまふ。いずれにしろ、当「発声学会」が主導権を握って推し進めるべきと考えますし、文部科学省や文化庁との話し合いの場を持つ時の為にもこれらの団体と手を組んでおくことが大切と考えております。

コロナ禍のこの3年間の空白を埋めて行くには、大変な労力と時間がかかることになると思ひますし、計り知れない程の情熱が求められることになるでしょう。

今現在、理事を務めておられるどの先生も、今の学会にはなくてはならない貴重な先生方ばかりです。今、正に理事選挙の真っ最中にあります。結果がどう出るのかは神のみぞ知るばかりで、私には皆目見当が付きませんが、この4年間一緒に苦勞を重ねてきて思ひたことは、有能で素晴らしいパワーをお持ちの方が何人もおられると言うことでした。

私の役目は残り僅かとなりました。これ迄ご協力、ご助力いただきました皆さまには、心から感謝申し上げます。

最後に大変厚かましいのですが、皆さまに、たつてのお願いがございます。ご存知のように理事及びスタッフの皆さんは、今は全くのボランティアで無給で働いて下さっておられます。どんな働きをしても報酬はありませんし、交通費も一円も出ておりません。岩手から来られても鹿児島から来られても、日本全国どこから来られてもゼロのままです。これは前会長の永井先生の時から、約7年間続いております。

もしも、心ある方がおられましたら、この“今の現状”を救うために、学会を支えて働いて下さっておられる方々のために、僅かでも結構ですので、ご寄付をしていただけましたならば誠に幸甚に存じます。

近い将来には、正常な運営ができるようになることを私は固く信じております。また、そうならなければ、「学会」の未来は消滅してしまうことになってしまうでしょうから。

どうぞ皆さまの温かいお心の内に、次世代の方々をお見守りいただけますことを心より祈願いたしております。

最後になりますが、これまで拙い会長を、4年間の長きに亘って、温かく支えて下さいました皆さまに、改めて深謝申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。

赤ちゃんの声

理事 小森輝彦

本学会の学会通信の中で発表すべきテーマとして、一般的にはもっと具体的、学術的な内容が求められているのではと想像するが、今回、敢えてこのテーマを選んだのは、理事の任期を終えるにあたり、この学会がより具体的な目標を持って未来に向けて邁進することを願ってのことである。

学会のウェブサイトにも発声指導法の研究団体でもある事が明記されているが、発声指導の様々な技術的なディテールと同じ位、声へのスタンス、歌うという営みへのスタンスが大切と思われ、幼稚な印象を持たれる学会員の方もいらっしゃるかも知れないが、敢えて「赤ちゃんの声」についての考察を皆さんと一緒に試みたい。

赤ちゃんは、問題が無い限り殆どの場合、生まれたあと、「誰からも教わらず」「大きな声で」「感情豊かに」「声をからさず長時間」泣くことができる。この当然と思われる事象をさらによく考えてみると、意外にも思える次の発見に驚くだろう。それは「人間という楽器、つまり声楽という楽器は、誰からも教わらずに、大きな声量で、感情たっぷりに、声をからさず長時間声を出す、と言う機能において、生まれた時点で既に完成している」と言う事実である。

我々が、より良い発声の状態に行き着いたとき、歌うことがより簡単で、自然で、心身の負担が少ない状態になっていることが多くないだろうか。これは前述の赤ちゃんの声が教えてくれる事実と符合する。良い声への道は言い換えると、服を「着込む」ことより「脱ぐ」ことに近い。つまり、不要なものを脱ぎ捨てることで、我々はもともと自分の中にある宝物を世界に開示できるのでは？

これはドイツの前衛芸術家ヨーゼフ・ボイスの言葉「人類はみな芸術家である」にも完全に符合する。赤ちゃんの声が我々に教えてくれるように、我々は誰もが、魅力的で完成された楽器を持って生まれてくるのだ。

私は今まで多くの歌を学ぶ人々と向き合ってきたが、その中に一人として「良い声を持たない人」はいなかった。声の魅力が隠れていることは多いが、魅力の存在を常に感じる事が出来た。誰もが世界で一つだけの花である、魅力的な自分の声を持つ。

今、世界中で、多様性を受容することの必要性が叫ばれている。そういう現代社会、現代ビジネス界、教育界などで起こっているムーブメントに目を向けると、声紋で個人を認証することが可能な事からもわかる様に、本来、声は一番多様性を身近に感じられるチャンスを与えてくれる。

ある水泳選手が「水泳を学ぶことは思い出すこと。習うことではない。なぜなら誰もがお母さんのお腹で泳いでいるから」と言っていたことがあり、深く同意した。歌もこれに近いと考える。我々の指導者の使命は「思い出し方」を真剣に探求すること、そこに良い声があることを信じて探求する事ではないだろうか。

最適解、唯一の正解を探すのが、唯物論的、自然科学的態度ではあるが、より人間的な態度が芸術以外のフィールドでも求められ始めている。元々十人十色の発声メソッドがある事は、本学会員には自明のことと思われるが、我々声楽教師も、知らずのうちの唯物論的、効率を目指す方向によってしまう危険を感じている。

また、私が学生の頃から、教鞭を執る今に至るまで継続的に、歌を学ぶ者がしばしば声楽教師から「あなたは声がない」と告げられる状況を体験している。これは「赤ちゃんの声」、つまりすべての人間の魅力を肯定する態度を尊重する立場からすれば、事実と反すると思うし、色々な意味で悲しい事だ。この状況を変えることが、日本の声楽界の発展に大きく寄与すると固く信じている。

同時に、この状況は日本人の自己肯定の低さの表れかも知れず、逆に言えば向上心の裏返しでもあると感じている。この問題の解決にはメタ認知、つまり民族単位でのくせに対する観察と考察も必要と思われるが、発声メソッドの差を超えて、我々が手を携えて「声へのスタンス」を再考することにより、本学会の存在意義も更に強まるものと考えます。

学会への思い

理事 森井佳子

14年前、恩師である合唱指揮者の大谷研二先生に本学会顧問の山田実先生を紹介していただきました。連絡先を伺い緊張して先生のお宅に電話をかけてみると、高くよく響く、透き通った美しい女性の声で「主人は今フランスに出張しております。」と返ってきたので、しどろもどろになりながら帰国のご予定を伺ったことを記憶しています。先生の出張がICVT（国際声楽指導者会議）のパリ大会だったということを知るのはそれからもっと後のことでした。2013年のブリスベン大会に山田先生と一緒に参加する予定でしたが叶わず、先生がお声がけしたメンバーと一緒に生駒里翠先生の研究発表のお手伝いということで初めてICVTに参加しました。当時の私は次の2017年ストックホルム大会、そして2022年のウィーン大会に日本から1人で参加することになろうとは、知る由もありませんでした。

山田先生のご紹介で私が発声学会に入会したのは2010年頃でしょうか。例会や夏季研修会は発声法の研究発表だけでなく、公開レッスンや、音声生理学に関する研究発表など、興味を惹きつけられる内容で、待ち遠しかったです。恥ずかしながら理事になって初めて例会や夏季研修会の研究発表やプログラム、学会通信の準備の大変さを思い知ることになり、学会の創立に関わった先生方はもちろん、理事として学会の運営に携わってこられた先生方には感謝しかありません。今まで学会で学んだことを還元し、次世代につなげていくために、自分にできることを生かして皆さまと協働していく所存です。

そして今はインターネットで世界と即時的につながることができる時代です。世界中の声楽指導者や声楽家とつながり、よりよい協働ができることを願います。

最近の研究から

理事 田中昌司

私は演奏時の脳の使い方を研究しています。方法は fMRI 画像計測と脳波計測です。これまでに多くの声楽家や器楽奏者に実験に参加していただきました。最近「声楽演奏時の脳内シーン構築」に関する論文を執筆しましたので（文献1）、その内容を簡単にご紹介します。

その研究は声楽家 42 名に参加していただいて行ったものです。お茶の水にある順天堂大学病院の MRI 装置の中でアリアのイメージ演奏をしていただきました。ご存じの方も多いと思いますが、MRI 装置の中では不動の状態を保たなければ画像を撮ることができないので、実際に声を出して歌っていただくことはできません。実験では、その代わりに心の中でアリアを歌っていただきました。それを私は「イメージ演奏」と呼んでいます。皆さん高いレベルでトレーニングされている方ばかりなので、イメージ演奏のための情報処理は実際の演奏のための情報処理に近いものであると想定されます。曲目はそれぞれご自分のレパートリーから選んでいただきました。研究の焦点は「アリアを歌う際に脳内でどのようなメンタルシーンがつけられるか」を知ることです。

実験データを上智大学の田中研究室で解析したところ、これまで誰も見たことがない新しい結果が得られました。図に示したのは、イメージ演奏時の機能的ネットワーク（安静時と比較して有意に強められたもの）です。これを解釈するには脳科学の知識が必要ですが、長くなるので割愛します。興味がある方は近著（文献2）をご覧ください。イメージ演奏時に声楽家はメンタルシーンを脳内につくります。アリアの内容に即したものだと思います。解析結果は、それが単なる視覚的なシーンではなくて、言語、ミラーニューロン（演技）、社会的認知、心情、報酬など多種多様な情報を統合したものであることを示しています。その中で一番強かったのは報酬系でした。MRI 装置の中でも心の中で歌っていた時に喜びを感じていたということでしょうか。またミラーニューロンに関しては、メンタルシーンが身体性を帯びていることを示唆していて、脳科学的にも大変興味深いです。

言語化しにくい主観の世界をテーマにした研究は脳科学では希少価値があります。この研究結果については、2022 年度に東京藝大で行った講義（先端知を識る：異分野横断オムニバス講座）でも紹介し、藝大生や実験に参加された方でその講義に出席されていた声楽家の方と議論することができました。本学会会員の皆様と共有させていただければ幸いです。

1. Tanaka, S., & Kirino, E. (2021). The Precuneus Contributes to Embodied Scene Construction for Singing in an Opera. *Frontiers in Human Neuroscience*, 15, 602.
<https://doi.org/10.3389/fnhum.2021.737742>
2. 田中昌司、伊藤康宏：音楽する脳と身体. コロナ社 2022
<https://www.coronasha.co.jp/np/isbn/9784339078268/>

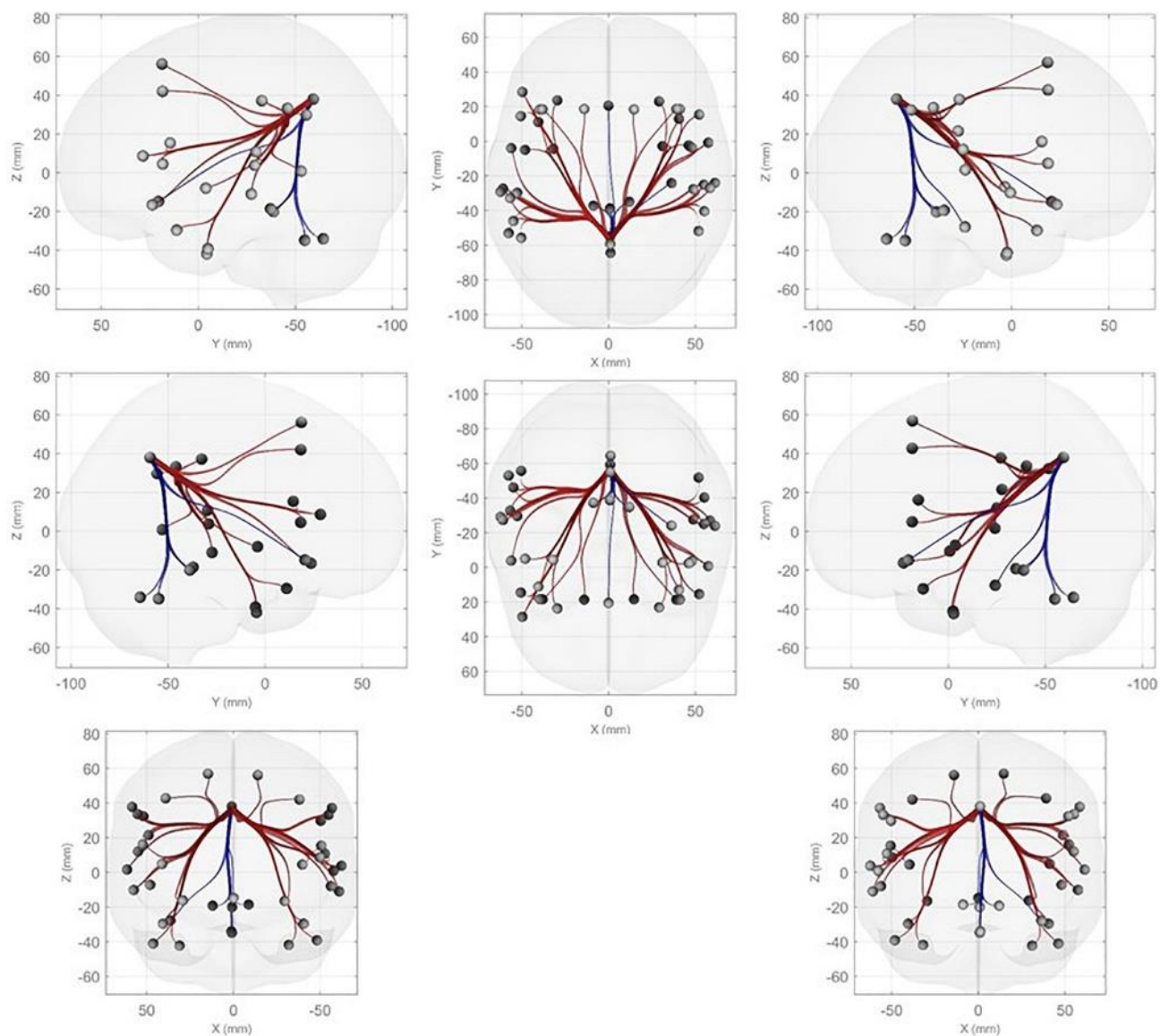


図. イメージ演奏時の機能的ネットワーク（安静時と比較して有意に強められたもの）

新入会員のご紹介

この度新企画といたしまして、2022 年度新入会員のご紹介をさせていただくことになりました。お呼びかけしましたところ、7名の皆様にご投稿くださいました。有難うございました。皆様のご研究の益々のご発展と今後のご活躍をお祈り申し上げます。

以下にご紹介いたします。

* 1. 氏名 2. 略歴 3. 学会への抱負 * 敬称略、五十音順で掲載いたします。

1. 岡元 (石田) 実和 (おかもと みわ)



2. 国立音楽大学声楽学科卒業、オルテバロックマスタにて最優秀賞受賞しディプロマ取得。イタリア各地・英・マンチェスター・独・ライプツィヒ、コンスタンツ、フランクフルト、バイエルン、ノルウェー・オスロ、デンマーク・コペンハーゲン等各地にて好演。2021年には指揮者山下一史と共演。好評を博す。北翔大学非常勤講師を経て、小田原短期大学准教授

3. 札幌在住ですが、学会にはできるだけ参加し学びを深めたい所存です。

1. 佐々木幹雄 (ささき みきお)



2. 岩手大学教育学部小学校教員養成課程卒業，同大学院教育学研究科修了。声楽を佐々木正利氏に師事。元岩手大学教育学部非常勤講師。岩手県の公立小学校の教諭。盛岡バッハ・カンタータ・フェラインのコンサートマスター。県内各地の市民による合唱団を指導。

3. 自分が関わっている諸団体への指導に生かすべく，声楽家や声楽の先生方の指導に関する理論や理念，方法などを生でたくさん学ぶ場としたいと思います。よろしく願いいたします。

1. 澤原行正 (さわはら たかまさ)



2. 愛媛大学教育学部、東京藝術大学音楽学部卒業。同大学院修士課程修了。桐朋学園大学大学院博士課程修了。博士号（音楽）取得。東京二期会会員。日本声楽アカデミー会員。

3. この度入会させていただきました。博士論文ではイタリアの作曲家ドニゼッティのオペラ作品について執筆しました。発声については論文では触れておりませんが、今後は当時の演奏習慣と共に発声についても研究を進めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

1. 田中朋子 (たなか ともこ)



2. 国立音楽大学卒業、洗足学園音楽大学大学院修了。ウィーン国立音楽大学卒業、同大学院（声楽教育学）修了。現在は演奏活動のほかフランクリンメソッドの指導者として音楽家向けの身体運動教育を行っている。慶應義塾大学大学院後期博士課程（音楽神経科学研究室）在学中。

3. 声楽という芸術の背景にある発声のメカニズムや身体の仕組みを勉強させて頂きたく、入会させて頂きました。ご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い致します。

1. 早川倫子 (はやかわ のりこ)

2. 博士（学術）、岡山大学学術研究院教育学域（音楽教育）准教授，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科芸術系博士課程准教授（兼任）

3. 乳幼児期から児童期の音楽的な発達を踏まえて，人が生きる文脈の中で「共に歌う」意味は何かについて研究しています。学会の先生方の声楽・発声に関する専門的な研究内容について勉強させていただきたいと思い入会しました。よろしく願いいたします。

1. 久野薫 (ひさの かおる)



2. 活水高等学校音楽コース、武蔵野音楽大学および大学院修了。二期会オペラスタジオ修了。ロータリー財団奨学生としてミラノ音楽院留学。ウィリアムマッテウツィ氏によるマスターコース受講。東京都内埼玉県の中学高等学校の音楽講師、活水高等学校音楽コース声楽非常勤講師、音楽教室講師等を経て、現在名古屋市立菊里高校音楽科非常勤講師、椋山女学園大学教育学部非常勤講師。

3. 限られたレッスン時間内で発声をいかに効率よく指導していくかが課題です。初歩の段階の学生を担当することが多いので責任を感じつつ、小さな「出来た」を積み上げていきたいと奮闘中です。夏期研修会と秋の例会へ参加させていただきましたが、とても良い刺激をいただきました。さらに理解を深めて実践していきたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

1. 正木実季 (まさき みき)



2. 愛知県刈谷市出身。愛知県立刈谷高等学校、愛知県立芸術大学音楽学部を卒業。同大学院修了。イタリア政府給付金奨学生としてミラノ・ヴェルディ音楽院歌曲科を首席修了。現在、愛知県立芸術大学及び椋山女学園大学各非常勤講師。聖テレジア幼稚園音楽指導者。刈谷音楽協会理事。

3. 専門的なからだの仕組みや発声に関する最新の情報などたくさんの方の事を吸収させていただき、今後の演奏や指導をよりよくしたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

例会報告

第 111 回例会報告

日時：2022 年 11 月 27 日（日）9：55～16：30

会場：東京藝術大学音楽学部大講義室（5-109）、第 6 ホール

総合司会 佐々木正利

A) 研究発表 司会 齊藤祐

発表者：齊田晴仁

テーマ：ハイスピードカメラと EGG で見た 4 つの声帯振動様式について

略歴：医学博士、さいだ耳鼻咽喉科クリニック院長、ヴォイステック音声研究所、昭和大学耳鼻咽喉科兼任講師、日本大学芸術学部音楽科非常勤講師

声帯振動の研究は、歌声研究で最も興味を持たれる内容であろう。日常臨床で行われているストロボスコープを用いた内視鏡検査では、1 秒間に 30 コマしか声帯振動が調べられない。音声を聞きながらの観察が必要な臨床ではたいへん役立つものの、研究レベルの詳細な観察は不向きである。この場合は声帯の接触面積の変化を調べる EGG と 1 秒間に 500 コマ以上の観察が可能なハイスピードカメラを用いた研究が必要となる。声帯振動様式は、従来から地声、裏声は良く知られている。今回は声楽家が最も興味があるそのつなぎの部位について、特に詳しい解説を行う予定である。またこれまで十分な検討が行われず、解明されていなかったボーカルフライ、ホイッスルボイスについても解説する。

発表者：佐藤心之介

テーマ：「声楽発声の呼吸と構え」について

— 本年度出版予定である著書「ヴォイス・トレーニング」より第 1 章の解説 —

略歴：元江東区立中学校長、声楽家、日本声楽発声学会相談役

この発表に当たり、当日会場で伴奏を担当し、協力して下さいました入川先生、本当にありがとうございます。また、合唱のパート練習を歌唱して下さいました先生方、感謝します。おかげさまで効率よく説明することができました。

この教材本は、利用の仕方によって、意味が違ったものになることは、ご理解いただけたと思います。一人ひとりの練習をグループで活用し、コーラスでのトレーニングに切り替え、多角的に発声練習を楽しくすることにあります。技術習得の機会を多く作って相互に意欲を高めようと工夫したものです。

指導者の立場からは、合唱団を育てるための手引きのようなものです。団員各自との進度の約束が、互いに見えるようにしたメモ帳の役割をしてくれます。

生徒の立場からは、日々の努力の効果を確認し、友だちとの発声を通して話し合いが出

来る材料です。自分の立ち位置を自覚し、自己評価を認識することが出来る目安のようなものです。

日々諸々の心がけている活動で、経験学習ができるものです。スポーツは、自己評価の優秀な教材ですが、発声法も感覚と感情、感性の変容を自覚できる貴重なものです。自分の発声の音色で類似したところをとらえ、それを楽器のように変化させ、ポジションの位置を自発的に適応させながら習慣化していく技術です。この高度な感覚を磨くという特異な芸事です。便利な教材として、利用していただけたら幸いです。

発表者：北蘭るみ子

テーマ：脳波測定データから見る Acuto（高音）発声のための鼻腔共鳴圧縮訓練（ニンニン）が及ぼすその効能について

略歴：武蔵野音楽大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修了。在学中は疋田生次郎、ロドルフォ・リッチ、大谷冴子に師事。1983年、イタリア政府給費留学生として渡伊。聖チェチーリア音楽院、ヴィヴァルディ音楽院で学んだ他、オペラの殿堂スカラ座でも研鑽を積む。カンポガリアーニ、スプルッツォラ、グアリーニ、バラッキ、オーセスの諸氏に師事。聖パウロ国際大学大学院主任教授。

2017年に私の発表したベルカント唱法に役立つ具体的な3つの訓練法について、ベルカント唱法の定義【chiara はっきり、fresca 新鮮に、dolce acqua 甘い水の様に】に添って私の個人的歌手体験及び発声法技術指導体験より、以下の3つの主な訓練方法が重要なものでは？という考えに至りました。

- 1 【chiara（はっきり）】…腹式呼吸によるペット（胸声）発声訓練の重要性
- 2 【fresca（新鮮に）】…腹式呼吸の腹部から直接歯に息を充てる息当て訓練
- 3 【dolce acqua（甘い水の様に）】…腹部からの息をニンニンニンと鼻腔共鳴を圧縮して鼻の上に抜ける（身体から外に離しつつの）鼻腔共鳴圧縮訓練

この3つの訓練法を巧く混ぜ合わせる事により、低音から高音迄自由に歌い熟せる歌唱時に使われる筋肉の調整に役立つと思われます。又、今回は、三つ目の鼻腔共鳴圧縮訓練（ニンニンニン）訓練前後の脳波測定前後の脳波を測定してみた所、以下の通りとなり、acuto（高音）発声訓練後、以下の様に脳波にも良い効果が、期待出来る旨、この訓練前後の脳波測定による科学的データから、証明されました。

発表者：森井佳子

テーマ：第10回ICVT国際声楽指導者会議に出席して

略歴：活水女子大学文学部英文学科及び活水女子大学音楽学部演奏学科声楽コース卒業。長崎県公立学校教諭、横浜市立学校教諭を経て、国際コーディネーター、声楽家。

2022年8月3日から8月6日までウィーンにて開催された第10回国際声楽指導者会議（ICVT）の概要と参加したプログラムについての報告。

B) 特別講演 司会 佐々木正利

講師：小林道夫（ピアニスト、チェンバリスト、指揮者）

内容：ドイツ歌曲公開レッスン

受講生と受講曲：

* 星野正人 (Ten.) 国際フランツ・シューベルト協会会員、本学会会員

Pf：小林滉三

F.シューベルト 「ギリシャの神々」、「秋」

* 田中雅史 (Bar.) 東京藝術大学大学院修士課程独唱科在学中

Pf：安野美咲

R.ワーグナー 『ヴェーゼンドク歌曲集』より「温室にて」

G.マーラー 『リュッケルト歌曲集』より「私はこの世に捨てられて」

* 釘持瑞穂 (Sop.) 国立音楽大学大学院修了、本学会会員

Pf：早川揺理

R.シューマン 「くるみの木」 F.シューベルト 「夕映えの中で」

報告 佐々木正利

あとひと月ちょっとで90歳を迎えられる、世界音楽界のレジェンド小林道夫先生の矍鑠とした登場に、参集した会員全員が畏敬の念を持って拍手を送り、期待の公開レッスンが開始された。2019年11月に第110回例会が開催された後、コロナ禍で2年半、対面式の例会が開けず、会員にとって待望の通常例会の幕開けにふさわしい特別講演の開会である。受講生の御三方も、2年半前より準備をなさり、延期続きであったその間、モチベーションを切らさずに待ち侘びていたと聞く。それぞれが持てる力を十分に注ぎ、小林先生の指導を仰いだ。

先生はまず楽譜の選択にこだわった。どこの出版社からいつ出版されたのか、作曲者の原点到忠実な楽譜であるのか、作曲者が何回か改訂していた場合、どの楽譜を採用するのが妥当なのか、原詩と歌詞が違った場合の処理をどうするか等々、音を出す前に十分に検証を行い、できれば複数の楽譜を比較検討し、校訂報告をつぶさに研究するなど、作曲者の意図を正しく判断し、実践していくことの大切さを説かれた。

同時に、楽譜に忠実に演奏することが具現者の務めであることも強調された。楽譜に込められた作曲者の意図、作詩者の思いをどう読み取るか。演奏者の浪漫や独善で勝手に改ざんしてはいけない。ダイナミックス然り、リズム然り、発音やニュアンスづけ然りである。まずは楽譜に書かれてある通りに忠実に演奏すること。最初からアゴーギクを多用したり、強弱の幅を極端に狭めたり（時には無頓着であったり）、母音や子音の処理をなおざりにしてはいけない。

声楽に対しては、声域によりポジションが変わりすぎ、響きの統一性が失われてフレーズが疎かになったり、レガートが散逸したりすることを戒められ、ピアノ伴奏においては、どの声部を一番立てるか、それぞれの声部の役割を熟知する努力をし、和音構成の中の音の性格を明確化すること、そして何よりもよく歌うことなどを指摘された。

当たり前のことであるが、小林先生がお弾きになられると、同じ楽曲がまるで別の曲のよ

うに生き生きと息吹を吹き込まれ、深淵かつ地平の広がりや頭を擡げ、得も言われぬ感動が心を覆うのであった。また、いつもながら先生の範唱は、声量こそないが専門家も舌を巻くほど音楽的で、それだけで学ぶ者（教えられる者）にこれほどない具体的な模範としてのインパクトを与えられる。この極意（と言っていいのだろうか）を、あとどれほどの年月、我々は享受できる機会を持てるのか、ご高齢の先生を思うと、とても不安になった。

しかし、小林先生は講演の締めにあたってこう仰せられた。90歳になってもまだまだ進歩できる自分がある。もっとこうしたい、先の世界を知りたいという好奇心がまだ潰えていない。でもそれを自らに感じ、取り得られるのは、自分が常に飢えていなければならないだけでなく、それを吸収できる技量の維持、もしくは成長が求められるのは言を俟たない。私は毎日スケールの練習を欠かしていない。新しいもの、より深いものを受け取るには、何歳になっても決して驕ることなく、課題と真摯に向き合い、自らを励まし切磋琢磨できる環境を求めて努力する以外ない、と。

私たちも、また学会も、安穩として老けこんでいる場合ではない、と心底考えさせられた。それほど、本物に触れた、いい意味でのショックに陥った講演、公開レッスンであった。会員からは、この小林先生の講演を聞いただけで、会員になれたことを感謝する、とした声も聞こえてきた。学会の存在価値、意義を見直してくださる大きな機会となったことは本当に喜ばしい。改めて小林道夫先生に感謝申し上げる次第である。

B) 現役声楽家の演奏とお話

司会 佐々木正利

講師：大西宇宙 (Bar.)

Pf：矢崎貴子

略歴：武蔵野音楽大学及び大学院、ジュリアード音楽院卒業。2018年にプレミエオペラ財団国際声楽コンクールで第1位とともにホロストフスキー記念特別賞を受賞。シカゴ・リリック・オペラで研鑽し、世界初演オペラ『Bel Canto』にてデビュー。オーケストラ音楽作品のレパートリーは幅広く、「メサイア」、「マタイ受難曲」、モーツァルト「レクイエム」、「カルミナ・ブラーナ」、ヴォーン・ウィリアムズ「海の交響曲」、ツェムリンスキー「抒情交響曲」、マーラー「大地の歌」、「亡き子を偲ぶ歌」、ブリテン「戦争交響曲」等。カーネギーホールにて「カルミナ・ブラーナ」、シベリウス「クレルヴォ」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」のソリストを務めた。2019年にセイジ・オザワ松本フェスティバルにてルイーザ指揮「エフゲニー・オネーギン」のタイトルロールで日本デビュー以来、国内外で「フィデリオ」、「カルメン」、「リナルド」、「道化師」、「電話」、「ローエングリーン」、「椿姫」、「トゥーランドット」等に出演。初CDはピアノに小林道夫を迎えて「詩人の恋」をBRAVO RECORDS（販売元キングインターナショナル）よりリリース。第30回五島記念文化賞オペラ新人賞、第30回日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞。

演奏曲：G.F.ヘンデル 『メサイア』より「万軍の主はこう言われる」

W.A.モーツァルト 『フィガロの結婚』より「訴訟に勝っただと？」

E.W.コルンゴルト 『死の都』より「私の憧れ、私の夢」

P.I.チャイコフスキー 『イオランタ』より「私のマティルダに誰が比べられよう」

G.ヴェルディ 『ファルスタッフ』より「夢かまことか」

報告 佐々木正利

今、世界を舞台に最も活躍している日本人歌手の一人、バリトンの大西宇宙氏をお迎えし、

バリトンの魅力を味わい尽くした1時間であった。

氏はまず本日のプログラミングについて言及された。ヘンデルのメサイアはバロック期の英語の詞、モーツァルトは古典派のイタリア語、コルンゴルトは現代のドイツ語、チャイコフスキーは近代のロシア語、ヴェルディはロマン派後期のイタリア語と、一見アラカルトで脈絡がないように見えるかもしれないが、欧米のオーディションでは、このように多国籍の言語で、時代も古今に亘る数曲をレパートリーとしなければならないという特徴がある。例えば日本では、言語によってレパートリーを決める傾向があるが、アメリカでは声種によってレパートリーを決める傾向がある、というのである。オーディションでも試験でも、まずは上記のような提出曲から自分が歌いたい曲を1曲選び、続いて審査員が選ぶということを繰り返す。それがプロトコルでもあるのだと氏は指摘する。多言語をマスターするのは簡単ではないが、少なくとも欧米では英語、独語、仏語、伊語、露語を操れないと仕事はできないので頑張っていると述べられた。

続いて一つひとつの楽曲について簡単なコメントを寄せながら歌唱を披露された。まずメサイアでは英語の発音はこうできますよとしたアピールとともにバロック期の様式に則った歌唱を提示、モーツァルトはほとんどの人がレパートリーに入れているほど基本的な歌唱法が試されるとし、コルンゴルトは1920年代に頭角を表したオーストリアの作曲家だが結構自分に合っている作曲家であると自負しているとした。チャイコフスキーの『エフゲニー・オネーギン』で日本デビューを果たしたが、この曲も大切なレパートリーであること。ロシア語の歌は、何しろキリル文字にまずは難しさを覚えるに違いないので中々とっつきにくいという面もあるだろうが、しかしながら、声楽的には喉も開きやすいし、まずはラフマニノフやR.コルサコフあたりから始められたらいいのではと推奨された。ヴェルディのフォード役は自分には少し重いかもしれないが、欧米では特にバリトン役の年回りに対してこだわりを持っており、歌手は自分のレパートリーを見守る責任がある。先ほど触れたオーディションでは、提出した5曲中4曲は現在の自分の身の丈に合ったもの、つまり明日その役を全曲通して歌っても支障がないといった楽曲でなければならないが、残りの1~2曲は5年後、10年後にどういう役柄を想定しているか、未来を垣間見せられる少し背伸びしたものでも良いと言われるので、チャレンジではあるが少しずつヴェルディにシフトしていこうかなと思っている、と締められた。

この後質疑応答に移り、歌詞を覚えるのは大変ではないかという質問に対して、確かに自分は譜読みは早い覚えるのはまた別問題である。しかし闇雲に覚えようとしてもうまくいくはずもなく、大切なのはなぜこの役は今こうしたことを言っているのだろうか、とか、とにかくなぜ、なぜ、なぜを繰り返すことで内容を深く読み取ることであり、書いて覚えるというのもありだが、理想的には情景等を思い浮かべながら何遍も歌うことを意識しているとされた。

歌唱の際、喉頭を下げるということを特に意識しているかとの質問に対しては、喉頭は自然に下がるものと思っている。無理やり下げると力が入ったり必ずしも良くはないとし、下

げて変なスペースを作ってから歌うのではなく、自然な音をセットしてから einsetzen し、そこから喉をマッサージしていくような感覚で自然に広げていくといった感覚。あくまでも自然な流れに任せていって押す (spingere) のは絶対禁物である。喉は結果的に下がっているのが理想的であるとした。

多様な文化がある中で、いろんな文化や言語で発声が変わるのか、あるいは例えばイタリア的な文化としてのイメージで発声を変えていくということがあるのか、という質問に対しては、オペラ歌手は多国籍の言語を行ったり来たりすることが常なので、いちいち今日はドイツ式、明日はイタリア式、明後日は日本式などと発声を変えることはできない。肝心なのは自分の声、自分の特性を掴んでちゃんと歌うということである。誰かの真似をすとか、こうしたレパートリーだからとか、こういう音質でとか、そういう固定観念をいつも排除しようと心がけていると答えられた。

最後に体調管理に心がけていることはとの質問に、月並みだがよく寝ることである。今、コロナ等の影響で体調が悪いとすぐに降板！といった事態が蔓延しているが、肝心なのは多少具合が悪くても支障をきたさないような本物のテクニックを日頃から身につけていること。それが本物の底力であると思って精進していると締め括られた。

まだ 37 歳というこれからますます活躍するであろう発展途上の大西氏、同邦人として誠に頼もしく、近い将来、世界の大西と呼ばれる時が来ることを確信して、フロアの皆さん、万雷の拍手で見送った。

◆開催予告

◎第 112 回例会・第 59 回総会 2023 年 6 月 4 日 (日) 於：東京藝術大学

研究発表：1. 川上勝功 2. 小森輝彦 総会：事業報告、会計報告他

特別講演：竹本浩典 現役声楽家の演奏とお話：山本耕平

◎夏季研修会・歌の集い 2023 年 8 月 23 日 (水)、24 日 (木)

於：日本福音ルーテル東京教会

A 講座：木下マテウス義久 B 講座：作曲家シリーズ C 講座：音響生理・物理学 D 講座：「歌の集い」演奏会 (講座の順は変更になる場合があります。)

◎支部例会

長野支部第 104 回例会 2023 年 4 月 29 日 (祝・土) 於：長野市芸術館

講演：ミュージカルの歴史と変遷 公開レッスン 講師：佐橋美紀

◎演奏会

川上勝功傘寿記念 Victoria Members Concert 於：磯子公会堂

2023 年 6 月 11 日 (日) 13:30 開演 (13:00 開場) 入場料 1,800 円

指揮 川上勝功 ピアノ 塚本雅子、早川揺理

出演者 Vocal Ensemble Victoria その他数名のソリストによる演奏

◎2023 年度 8 月「歌の集い」出演者募集

独唱および声楽アンサンブル：1 組 20 分×4 組 応募締め切り 5 月 31 日

* 詳細は学会 HP をご参照ください。

◆執行部会、理事会、理事選挙管理委員会開催記録（2022年8月以降～2023年4月）

執行部会開催記録

●2022年度第3回執行部会議（拡大）

1. 招集形態：Zoomによるオンライン
2. 開催日時：2022年（令和4年）12月11日（日） 18時30分～20時30分
3. 出席者：川上、齊藤、森井、竹田、佐々木、池田、三枝、鈴木、西浦

●2022年度第4回執行部会議

1. 招集形態：対面式（予備選挙開票作業後）
2. 開催日時：2023年（令和5年）1月22日（日） 18時30分～20時30分
3. 会場：東京文化会館小会議室2
4. 出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、佐々木徹（事務局）

理事会開催記録

●2022年（令和4年）度第4回理事会議

1. 招集形態：Zoomによるオンライン会議
2. 開催日時：2022年（令和4年）10月31日（月） 19時00分～21時10分
3. 出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、河合、小森、三枝、菅、竹田、田中、西浦
佐々木徹（事務局） 欠席者（委任状あり）：鈴木、豊田

●2022年（令和4年）度第5回理事会議

1. 招集形態：対面式（第111回例会終了後）
2. 開催日時：2022年（令和4年）11月27日（日） 19時00分～21時00分
3. 会場：東京文化会館小会議室1
4. 出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、三枝、菅、鈴木、竹田、佐々木徹（事務局）
欠席者（委任状あり）：河合、小森、田中、豊田、西浦

●2022年（令和4年）度第6回理事会議

1. 招集形態：Zoomによるオンライン会議
2. 開催日時：2022年（令和4年）12月29日（日） 16時00分～17時40分
3. 出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、河合、小森、菅、鈴木、田中、竹田、西浦
佐々木徹（事務局） 欠席者（委任状あり）：三枝、豊田

●2022年（令和4年）度第7回理事会議

1. 招集形態：Zoomによるオンライン会議
2. 開催日時：2023年（令和5年）1月23日（月） 19時00分～20時30分
3. 出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、河合、小森、三枝、菅、鈴木、田中、竹田、
豊田、西浦、佐々木徹（事務局）

●2022年（令和4年）度第8回理事会議

1. 招集形態：Zoomによるオンライン会議
2. 開催日時：2023年（令和5年）4月9日（日） 19時00分～20時30分
3. 出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、三枝、鈴木、田中、豊田、西浦、
佐々木徹（事務局） 欠席者（委任状あり）：河合、小森、菅、竹田

理事選挙管理委員会

●2022年（令和4年）度第3回定期理事会議 8月23日（火）

選挙管理委員が承認された。

委員長；山本富美 委員；清水喜承、入川めぐみ

●2022年（令和4年）12月11日（日）

2023年度予備選挙資料発送（2023年1月14日消印有効）

●2023年（令和5年）1月22日（日） 東京文化会館小会議室1

2023年度予備選挙開票作業（投票数98通、有効投票97通）

選挙管理委員；山本富美、入川めぐみ

執行部；川上勝功、佐々木正利、齊藤祐、森井佳子

事務局；佐々木 徹 アルバイト；佐々木笑美子、川上ひろみ

●2023年（令和5年）1月22日（日）

Zoom 理事会で理事予備選挙結果報告 選挙管理委員；山本、入川

20名を本選挙有資格者として推挙

●2023年（令和5年）2月20日（月）

2023年度理事選挙立候補者13名確定

●2023年（令和5年）3月5日（日）

2023年度理事本選挙資料発送（2023年4月1日消印有効）

●2023年（令和5年）4月9日（日） 東京文化会館会議室

2023年度理事本選挙開票作業（投票数109通、有効投票数109通）

選挙管理委員；山本、清水、入川 執行部；川上、佐々木、森井

事務局；佐々木 アルバイト；川上

●2023年（令和5年）度第8回理事会議 4月9日（日）

Zoom 理事会で理事本選挙結果報告 選挙管理委員；山本、入川

10名の新理事当選者が確定

編集後記

学会通信第 49 号をお届けします。3 年ぶりの例会開催は、参加された方々におかれましては研究発表や演奏、講演等を聴いただけでなく、対面での再会を喜び合う時間でもあったことでしょう。前回の例会に参加できなかった方は、どうぞ奮って次回の例会にご参加ください。次回の第 112 回例会は 5 月の第 4 日曜日ではなく、**6 月 4 日（日）の開催**となっておりますのでご注意ください。コロナ禍で外出や活動が制限されたことによって、オンラインでの音楽活動も活発になり、音楽との向き合い方も加速して多様化したように感じます。またペーパーレス化やキャッシュレス化の流れもあり、本学会も学会通信や例会案内などの配布や、年会費・受講料の納入方法も見直す時期に来ているように感じる今日この頃です。
編集担当：齊藤 祐、森井 佳子

日本声楽発声学会

会 長 : 川上 勝功
副会長 : 佐々木 正利
副会長・事務局長 : 齊藤 祐
事務局次長 : 森井 佳子
エグゼクティブ・アドバイザー : 竹田 数章
理事（五十音順） : 池田 京子 河合 孝夫 小森 輝彦 三枝 英人 菅 英三子
 鈴木 慎一朗 田中 昌司 豊田 喜代美 西浦 美佐子

日本声楽発声学会事務局 佐々木 徹
e-mail:info@jars-voice.org
Tel/Fax:03-6804-0626
〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4
振替口座：00170-0-119920
日本声楽発声学会 HP
<http://www.jars-voice.org/>

学会通信第 49 号 2023 年（令和 5 年）4 月発行 発行者：日本声楽発声学会 編集者：齊藤 祐、森井 佳子
